

シムズの *Vasconcelos* におけるホームと荒野

中 村 正 廣

(外国語教室)

Home and Wilderness in Simms's *Vasconcelos*

Masahiro NAKAMURA

(Department of English)

Vasconcelos, or a Romance of the New World (1853) はスペイン人エルナンド・デ・ソト (Hernando de Soto) の新大陸征服 (コンキスタ) を描いたシムズ (William Gilmore Simms) のロマンスである。トレント (William P. Trent) によれば, シムズが外国もの, 特にスペインロマンスに取り組んだ理由は二つあったらしい。一つは, 二百年にも満たない米国の伝説に拘るよりも「もっと古くて外国の, 従ってもっと威厳のあるテーマ」¹を扱った方がいいという忠告をシムズが友人たちから受けたことであり, もう一つは, アメリカロマンスの先駆者であるクーパー (James F. Cooper) が外国ものに挑戦したが失敗に終わったことに刺激されたことである。

しかし, このようにシムズの外国ロマンスを十把一絡げに論じることは, 各作品の特色を見失わせる危険性がある。スペインものは二つのグループに大別した方がよいと思われる。一つのグループは *Pelayo* (1838) と *Count Julian* (1845) であり, *The Damsel of Darien* (1839) と *Vasconcelos* がもう一つのグループを構成する。前者のグループにはトレントが述べたシムズの意識が明瞭に見られ, 後にシムズ自身下らぬ作品群と認めているが, 後者はシムズが高く評価するロマンス群である。第二の作品群がシムズをして「私の最高の作品」²と言わしめているのは, この作品群が「シムズがほとんど知らなかったスペインの情景とトピック」³から「スペインのアメリカ入植地の初期の歴史」⁴にその焦点を移しているからである。コンキスタを描いている *Vasconcelos* は, アメリカ入植という点においてアメリカの行方を占うボーダーロマンスと同じ範疇に入ると言ってよい。本稿では, *Vasconcelos* を外国ロマンスとしてではなくボーダーロマンスのひとつとしてホームと荒野の対立という観点から分析し, 同時にシムズの他のボーダーロマンスとの関係も考察したい。

(1)

Vasconcelos はシムズが深い関心を寄せたアメリカ南部の初期の歴史と深く関わったデ・ソトのコンキスタを扱っている。19世紀中葉において収集可能であっ

たデ・ソトに関する資料をシムズがどの程度援用したかは, シムズが1847年から1848年にかけてピケット (Albert James Pickett) に書き送った複数の書簡から窺い知ることができる。インディアスの歴史に関して, プレスコット (W.H. Prescott) の *History of the Conquest of Peru* を初めとして, スペイン人やフランス人の著書の英語訳など, シムズは数多くの歴史書を所蔵し, また歴史協会や図書館で閲覧している。デ・ソトのコンキスタに関する彼の蔵書としては, 「デ・ソトの遠征の概略」⁵を含む南部関係の歴史書のみならず, デ・ソトの遠征に参加した「ポルトガル人の目撃者の報告書」⁶もあった。

デ・ソトのフロリダ遠征に関する一次資料としては, 遠征に参加した三人の士官による個別の記録と, さらに遠征から帰還した兵士の話に基づいて綴られた記録の, 計四つのナラティブが現存している。シムズが *Vasconcelos* を書いた当時, 英語版で出版されていたのはエルヴァスの紳士 (ポルトガル人) による記録と, ビードマ (Luys Hernandez de Biedma) の資料だけであり, 後者が四資料の中で最も短く, かつ, ポルトガル人の記録を立証していること, また, シムズがピケットに推奨しているアーヴィング (Theodore Irving) の著書が英語版のなかったデ・ラ・ベガ (Garcilaso de la Vega) の *La Florida* の内容を再現していること, さらには, ランゲル (Rodrigo Rangel) の記録はデ・ソト軍のルートについて正確な位置づけを与えてくれるものの, そのスペイン語による出版が1851年でその当時余り注目されていなかったこと, 等を考慮すると, シムズはデ・ソト関係の基礎的資料を渉猟していたと言ってよい。⁷

しかしながら, 当時のスペイン独特の計測法と, デ・ソト軍が持ち込んだ病気のために生じたアメリカ先住民の移動のため, これらの資料は後の歴史家が行程を辿るには余りに多くの不可解な記述を含んでいた。そのために, デ・ソトの遠征の行程は, 数多くの「概略」が書かれていたにも拘わらず, 闇に閉ざされてきた。1939年のスワントン (John R. Swanton) 編によるデ・ソトの遠征に関する議会リポートから半世

紀を経た現在でも、デ・ソトが辿った正確なルートについては多くの研究者が論争を繰り返している状況にある。最新の研究では、従来タンパ湾とされてきたデ・ソトのフロリダ上陸地点はタンパより南のケーブ・コラルに、そして、サウスカロライナでデ・ソトがコフィタチクイ(様々な綴りがあり、*Vasconcelos* では“Cofachiqui”と綴られる)の村と遭遇する地点も、シルバー・ブラフからサウスカロライナ州の州都コロンビアに訂正されている。さらには、デ・ソト軍の遠征において最大の障壁となった「偉大なる川」は従来ミシシッピ川とされてきたが、これも実はオハイオ川であり、やがてデ・ソト軍が遭遇するミシシッピ川とは別のものであったとする説も出てきている。⁸

シムズが19世紀の歴史家の影響を受けていることは、*Vasconcelos* の中で彼がシルバー・ブラフと「偉大なる川」等の地理的位置の従来解釈を踏襲していることから明白である。さらに、ヌーノ・デ・トバルとレオノーラ・ボバディアの結婚までの経緯、トバルの司令官の位の剝奪、ポルトガル人アンドレ・デ・バースコンセロス(実在の人物は Andre de Vasconcelos と綴る)の配役など、ポルトガル人の記録に登場する数多くの人物を *Vasconcelos* の主人公と絡めている。しかし、ここで重要なことは、シムズが闇に包まれたデ・ソトの遠征の歴史的事実をその想像力によって大きく変容させ、フィクション化していることである。その最たるものは、スペイン人とポルトガル人から成る混成集団のデ・ソト軍の中にポルトガル人フィリップ・デ・バースコンセロスという主人公を創造していることであろう。⁹デ・ソト軍の中で士卒も持たないこの人物をデ・ソトと対決させ、やがてはアメリカ先住民のコカラと結婚させるという物語の展開は、まさにシムズが「事件と背景の描写において架空のものを気随気ままに思慮深く使用」¹⁰していると言ってよい。

シムズの創造はそれだけにとどまらない。デ・ソトの最期の場面では、デ・ソトが自分の宿舎に呼びつけた酋長が訪問を拒否するという歴史的事実は、フィリップがデ・ソトの前に現れて自らの勝利とデ・ソトの敗北を宣言するという形に大きく変えられている。モーヴィラの戦いについて、スペイン人とポルトガル人の語り手たちは「プライドと虚栄心」から「詳細を曖昧にし、一部修正し、歪曲という行為すらも取っている」とするシムズは、「1619年頃に」活躍したチカソー族の司祭長ウーレナ・イシオボラのペルソナを借り、「チョクトー語の文字で樹皮に書かれた」「有名な手書き写本」を読者に提供する。¹¹この意味において *Vasconcelos* は、スペイン人のコンキスタをアメリカ史の始まり(植民地議会開催と黒人奴隷の上陸)と絡め、同時に、後のアメリカ先住民と白人の関係を形成する上で大きな影響力を持ったスペイン人の視点を根底か

ら覆すことをやってのけている。

興味深いのは、デ・ソトがフロリダに出発する直前まで滞在したハバナの描写が、五十章からなる物語の実に三十一章までを占めていることである。このために *Vasconcelos* はこれまで様々な見当違いの批判を受けてきた。確かに米国南部におけるデ・ソトのコンキスタを描くロマンスにしてはアンバランスな章構成である。シムズの友人であり彼の作品の批評家でもあったハモンド (James Henry Hammond) の批判もここに集中している。ハモンドは、ハバナにおけるスペイン軍の描写を「非常に自然だが、芸術的ではなく、凝縮されておれば興味深いものになったと思われる」と批評し、サウスカロライナのシルバー・ブラフ(ここはハモンドのプランテーションがあったところである)でデ・ソトがアメリカ先住民の女酋長コカラと出会った後の状況、及び、デ・ソトの死とヒロインのオリヴィアの死について「詳細に効果的に描く」¹²べきであったとしている。しかし、シムズはデ・ソトとオリヴィアの死の描写を必要最小限の紙数にとどめている。

ハバナのパートを高く評価する批評家がないわけではない。例えば、シムズはこのパートにおいてロマンス作家としてある程度の成功を見せているとトレントは評価している。しかし、主人公フィリップとデ・ソトの対立を不自然であるとし、そして、フィリップのコカラとの結婚という異人種間の結婚を「致命的過ち」¹³と指摘していることからわかるように、トレントがフィリップの結婚を必然的に生じさせるハバナのパートを高く評価しているとは言いがたい。もう一人ハバナのパートを評価している批評家を挙げよう。ギルズ (John C. Guilds) は、メルヴィルの *Moby Dick* の章構成とよく似た「フロリダ上陸後の劇的急展開の下準備」¹⁴としてハバナのパートは興味深いとしている。しかし、ギルズの関心もデ・ソト軍とアメリカ先住民との衝突対決にあり、その意味では第一部が異様な長さであることを認めていると言えよう。¹⁵

コンキスタドールとしてのデ・ソトは、シムズの個人的感情を刺激する人物であった。1824年の終わりが1825年初めの頃、シムズはひとりミシシッピ州で開拓に従事していた父を訪ねているが、このときデ・ソトの部下の墓と遭遇している。父と二人づれで原始林の中を旅している途中、午睡を取ったシムズは、彼の枕の下にひとつの墓があることを父に指摘され、とっさにそれがデ・ソトの部下の一人の墓であると父に答えている。シムズの詩「インディアン村チルハウイー」の中の若者と同じように、父に反論されながらも、シムズはロマンチックな想像力を決して捨てず、後に1842年、アラバマ大学で行った講演の中でこの体験に触れている。¹⁶ならば、四年にわたるデ・ソトのコンキスタの背景となったフロリダ、サウスカロライナ、ミ

ズーリ、アラバマ、ミシシッピ等の南部諸州よりも、デ・ソトが六ヶ月余りしか滞在しなかったハバナの描写にシムズが拘るのはなぜか。この素朴な疑問を看過しないことこそが、作者の意図のみならず作品が意味するものを読者に明らかにする契機となると思われる。

シムズは *Views and Reviews* の中で、米国史を四つの時代に分け、ロマンスの素材として重要な歴史的事件の具体例をそれぞれ挙げて説明しているが、デ・ソトは米国史の第一期の中でシムズの大きな関心を喚起した人物であった。ヴェラツァーノ、カルチエといった探検家、そしてアカディア植民地よりも、米国南部のスペイン人の発見に注目するシムズは、しかし、ボンセ・デ・レオン、ルーカス・バスケス・デ・アイヨンではなくデ・ソトについて特筆している。デ・ソトがシムズの関心を引くのは、彼が歴史上コルテスやピサロと同じ重要性を持つコンキスタドールに属しつつも、後のアメリカ南部の歴史の始まりを形成する役割を担った人物であるからである。シムズは1842年のアラバマ大学での講演で、スペイン人は金と征服を新世界に求めたのに対してイギリス人はホームを求めたと述べているが、*Vasconcelos* におけるデ・ソトは、ホームたるハバナを離れて西へ流浪する征服者であり、西漸運動に突き動かされるアメリカ人の原型として提示されている。

Views and Reviews でシムズが披露するデ・ソトの「偉大なるドラマ」¹⁷は、三部から構成されている。第一部では、フロリダに「第二のテノティトランかペルー」¹⁸を見つけようとするデ・ソトが、その「卑しむべき目的」「病的な大望」「狂気じみた高価な宝石の追求」¹⁹故に妻への愛を犠牲にする様が描かれている。第二部では、コンキスタの行軍、特にアパラチ山脈に到達し、ミシシッピ川に遭遇するまでのアメリカ先住民との壮絶な戦いが、第三部では、死の床についたデ・ソトがコンキスタドールとしてのプライドをアパラチの一戦士によって微塵に砕かれる場面が、それぞれ提示されている。何よりもシムズが関心を示すのは、病的な大望に動かされるがままに妻を置き去りにするデ・ソトの「運命」である。スペイン人のコンキスタは「今現在我々自身が演じている驚嘆すべきドラマの、小さいが印象深い第一歩」(p. 2) であるとするシムズにとって、デ・ソトのドラマはアメリカ人のドラマの端緒であった。

(2)

Vasconcelos の第一部の主眼はキューバにおけるスペインの騎士文化の考察にある。十六世紀のスペインの騎士道小説では、見知らぬ国で数々の武勲を立てた英雄は王国や島を与えられて報われており、多くのコンキスタドールはこの文学に影響を受け、新しい遠征

へと駆り立てられた。²⁰デ・ソトがペルー遠征から帰国して得た贅沢で安逸の生活を捨てフロリダ遠征に向かったのも、新世界のどこかに自らが治める独立国家を獲得せんがためであった。槍と剣の遣い手で馬術に秀でたデ・ソトはハバナで闘牛の後に盛大な馬上試合を主催し、その馬上試合において観客はフィリップの「高潔な品性と非の打ち所のない英雄の資質」(p. 244) を称えている。*Vasconcelos* の世界の中核をなすのはこのような騎士たちであり、騎士文化である。

ハバナの馬上試合は、フィリップがフロリダ遠征に傾ける「騎士としての情熱」(p. 21) がいかほどのものかを試すために、デ・ソトの妻イザベラ・デ・ボバディラによってデ・ソトに提案され、開催される。イザベラによれば、騎士的な大望は「ありふれた生活の鈍重な動きに大きな苛立ち」(p. 20) を覚える点において「高潔な欲望」(p. 20) である。「征服を求める熱心で気高い欲望」(p. 20)こそが騎士道であり、そして、この騎士道的情熱は愛と矛盾することはない。イザベラが馬上試合を提案するのは、オリヴィアの愛を勝ち得たフィリップがオリヴィアをハバナに残してフロリダ遠征に出かけると信じて疑わないからである。

デ・ソトとフィリップの双方が騎士道に執着しながら、しかし、その情熱は異なる方向を志向している。フィリップはイベリア半島でムーア人と戦い、フロリダの荒野をカベサ・デ・バカ(パンフィロ・デ・ナルバエスの艦隊の出納係で、難破の後八年間リオ・グランデの先住民の間で放浪生活を送った三人のひとり)とともにフロリダの荒野を探検したこともある。フィリップはペルー遠征において活躍した英雄でもあるという人物設定は、デ・ソトとフィリップの間の差異を無意味なものにするほどの類似性を提示している。しかし、フィリップはデ・ソトと違い、オリヴィアへの愛が成就した暁にはフロリダ遠征を放棄するつもりでいる。彼が彼女への愛に執着する理由の一つとして、ポルトガル人への敵対感情からデ・ソトがフィリップを高く評価しないために「軍人としての情熱」(p. 43) が冷めたことが挙げられようが、フィリップはまた求愛の結果に関わりなく遠征への参加を諦めると友人のデ・トバルに断言している。つまり、ペルー遠征から帰国したデ・ソトがカベサの話にコンキスタドールの情熱を喚起され、イザベラをハバナに残して遠征に出かけるのに対し、フィリップはフロリダのパールや金、先住民奴隷を手に入れることよりも「さらに貴重な他の物」(p. 131)、ハバナに居残ること、言い換えれば、ホームを求めることを選択するのである。

騎士道精神はデ・ソトとフィリップの対立の展開の中で中世的な意味あいとは別の様相を呈してくる。シムズによれば、進取の気性と勇氣、「遂行に不可欠の美德」(p. 188) を象徴する点において、騎士道は「熱狂の別名にすぎない」(p. 188)。貴族社会のそれとは異質

なこの特色は、フエンテスがコンキスタドールについて述べているものと同じである。

マキャベリは実際、征服者たちの兄である。なぜなら『君主論』は、ルネッサンスの成り上がり者（ホモ・ノブス）——神の摂理に反し意志の力によって、自分が受け継いだ特権や貴族の地位や生まれに対する過剰な義務から逃れ、自由に自らの運命を切り開く旅に出る「新しい人間」——の手引書以外の何ものでもないからだ。君主は、この世の王国を征服する。ここにある国の統治こそが、ユートピア（どこにもない国）の否定なのだ。（中略）われわれは、新世界の征服がモロ人に対するスペイン国土回復運動の余勢を買っていたことを理解しなければならない。征服者たちはこの衝動の産物だった。だが、それはまたルネッサンスの全ヨーロッパに共通するマキャベリ的近代個人主義の産物でもあった。彼らは“アリスト”，つまり出世欲に燃えた野心家の男たちだった。彼らはあらゆる階級の出身で、労働者階級の者もいれば、小貴族もいた。しかしたいしては、勃興してきた中産階級の出であった。²¹

フィリップは士卒も爵位も持たぬ平民であり、デ・ソトも「貴族の出」（p. 5）でありながらペルーでは「出自より個人的長所が勝った」（p. 5）お陰で富と名声を得ている。「コルテス、ピサロ兄弟、オヘダ、バルボア、その他大勢の者」（p. 179）は、貴賤の差こそあれデ・ソトやフィリップと同じ部類に属すと言える。彼らを支配するエネルギーは、彼らに「遂行」という驚くべき使命を与える。「天才と勇気を同様に発揮する」（p. 179）これらのカスティリア人は、その貪欲と大望が休息することを知らない点で、後のアメリカ人の原型となる。

The compound passion of avarice and ambition left them in no humor for repose. Without pause, yet not blindly, they pursued their mission; and the impatient and fevered restlessness which it demanded and excited, rendered them superior to every persuasion that threatened conflict with their strength. These could only prevail finally with the race which, with ample luxuries in possession, find no longer in their thirst the provocation to performance. . . . They have still a great work to do, are still goaded by fiery passions which will not suffer them to sleep, and they seize their luxuries with the mood of the hurrying traveler, in a strange land, who plucks the flower along the wayside as he passes, and hastens on his way. . . . The fresh desires of achievements kept

them from all loitering. Acknowledging the sweets and beauties of the scene, as proffered them by Nature—acknowledging with due appreciation the bounty in her gifts—they tasted only, and pressed forward. . . . They had then fiercer impulses to appease, and more exacting and earnest appetites to satisfy. They obeyed a destiny! They were still chiefly sensible of passions taught in the market-place; by the multitude; during the struggle; in which to hope is to contend;—strife, blood, conquest, glory and personal prominence. . . . (pp. 179-180)

見知らぬ国で路傍の花を手折りながら忙しく先へ先へと進む旅人、そして、運命に従うようにして「闘いと血と栄誉と個人的名声」を求めるこの集団は、シムズのボーダーロマンスに登場するアメリカ人にほかならない。*Charlemont* (1856) と *Beauchampe* (1856) の中で、アメリカ白人が先住民から強奪した肥沃な土地において社会秩序を築き上げ改善することを怠り、やがて新しいカナンの地へ躊躇することなく移動する姿をシムズは描いているが、²² *Vasconcelos* のスペイン人たちはこの点に関してアメリカ白人の先駆者である。

主人公が愛を失って故郷を去るという物語の展開は、シムズのボーダーロマンス *Guy Rivers* (1834) と *Richard Hurd* (1838) に顕著に見ることができる。この二つの作品の主人公が故郷を捨てて辺境地帯に飛び出していくのは、故郷において彼らの愛が報われないためであったが、後に彼らは愛の喪失自体が彼ら自身の過誤によるものであったことを知り、やがて帰郷する。ボーダーロマンスで描かれる旧南西部の辺境は暴力と流血と死で彩られた世界であり、白人開拓者の土地・富への飽くなき欲望が逆巻いている。主人公たちが戻っていく故郷は牧歌的な世界であり、シムズが理想とするサウスカロライナの大西洋沿岸地方がモデルとなっている。²³

Vasconcelos において、フィリップはオリヴィアへの愛のためにフロリダ遠征を放棄しようとする。結局フィリップはオリヴィアの隠された秘密を知り傷心を癒すためにフロリダの荒野へ入っていくことになるが、*Vasconcelos* が見せる上記二つのボーダーロマンスとの決定的相違は、フィリップの荒野への逃亡が、ホームとしてのハバナに彼が求めた大きな理想と期待が完全に崩れ去ったことに起因していることである。このように考えると、ホームとしてのハバナはこの作品において大きな意味を有している。

ハバナは牧歌的理想郷として提示されている。デ・ソトのフロリダ遠征の基地となったこの村は、デ・ソト到着の前にフランス軍の侵攻を受けて灰燼に帰したとはいえ、百戸ほどの「成長しつつある小村」（p. 177）

であり、ハバナ湾は「無為の楽しみ」(“*dolce far niente*”, p. 178) に溢れている。

Her [Havana's] beautiful bay, then as now lacked but little of the helps of art to render it as wooing and persuasive as that famous one of the Italian; and, in the luxuriance of her verdure, which covered, with a various and delicious beauty, all her heights; in the intense brilliancy and clearness of her moonlight, which seemed rather to hallow and to soften, than to impair the individuality and distinctness of objects, as beheld by day; in the exquisite fragrance from her groves, and the soothing sweetness of the sea-breeze—which, in that tropical climate, one regards as the most blessed of all the angels who take part in the destinies of earth—playing like a thoughtless and innocent child among forests of vines and flowers—the fancy became sensible of a condition, in which life can offer nothing more grateful, or more fresh; and, to be sure of which always, ambition might well be satisfied to lay aside his spear and shield forever. (pp. 177-8)

新緑が萌える小さな森は芳しい香りを放ち、心地よい海風は「地上の様々な運命に関係する天使の中でも最も神聖な天使」に見える。このすべてが静穏と心地よさの中にある状態は、アメリカ人の大望と衝動を吸収するアメリカの森のそれである。

フィリップが求愛するオリヴィアの屋敷はハバナの村と湾が見える高台にあり、無邪気な昆虫や鳥の鳴き声、「熟した様々な果実、目もあやな色彩と香りの花々、この世のものとは思われぬ心地よい蔓や木の葉」(p. 24) に囲まれた「この恵まれた帝国」では、すべての熱情が「くつろいでいる」(“at home”, p. 24)。先ほど述べた「無為の楽しみ」(“*dolce far niente*”, p. 24) という表現はシムズによってオリヴィアの屋敷にも適用されており、文字通りオリヴィアの屋敷は「放浪性」(p. 178) と「原住民の野蛮性と言わぬまでもその淀み」(p. 178) を示唆する一方で、「人間の足枷となってきた・・・因習」(p. 178) の忘却であり、「生が憂慮を、獲得が労役を、快楽が休止を意味しない」(p. 178) 夢であり、つまりは、「遂行」の否定を象徴する。

オリヴィアはその高貴な生まれと立ち居振る舞いにおいてシェイクスピアの『十二夜』のオリヴィアを想起させる。*Vasconselos* の第四章の章頭の題辞として『十二夜』からの引用があり、シムズがオリヴィアのモデルとして意識していたことは明白であるが、シムズによってオリヴィアはさらに黒髪の女性の特色を色濃く与えられている。背が高く、秀でた顎と「艶のあ

る黒髪」(p. 30) は誇りと威厳を見せ、その「ムーア人の目に見られるうつ伏せかげんの黒い目」(p. 28) は、「一回のきらめきで燃焼するような電光を放つこともできる」(p. 28)。女性への忠誠、武勇、愛といったキリスト教的騎士道精神が形骸化しているとするオリヴィアは、騎士道が説く愛が女性に求めるものは奴隷であり、結婚は「喜びの吊いの鐘 [終焉] を告げる危険なもの」(p. 50) であると考え、「愛するからこそ、愛に心を委ねることはしない」(p. 50)。

オリヴィアは優美と威厳に満ちた美、そして洗練された知性の点において、*Guy Rivers* のイーディス・コレトンや *Richard Hurd* のメアリー・イースタビィと似ているが、二人が持っていた「富が余暇をもたらす余暇がさらなる優美を生み出す安住の地にのみ属する」例の伝統的で改良を重ねた社会生活の形態を評価する²⁴側面は持たない。オリヴィアにはそのような社会形態を象徴する騎士道文化への従順さはない。十七才の少女にはおよそ見られぬ「思考と感情の成熟の印である、真剣さ、激しい視線と表情」(p. 28) がオリヴィアにはある。彼女の激情はメーディアのそれに喩えられる。

But, as she recognized the accents of Don Balthazar, she schooled her mood to indifference; drawing a long deep breath, and looking a mixed scorn and hatred, which, could her features have been seen at the moment, would have embodied a truthful portrait of those of Medea, about to take her flight for Athens, in her chariot dyed with the gore of her kindred. Intense and bitter was the momentary feeling of indignation which darkened her cheeks with red, only to subside, in the next instant, into a more than mortal paleness. (p. 118)

人類最初の建造船アルゴの冒険譚において、メーディアは魔法を使ってイアーゾーンが金毛の羊皮を手に入れるのを助けて結婚、しかし、コリントスに移住して十年後、イアーゾーンが富と権力を求めて他の女性クレウーサと結婚しようとしたために、メーディアは花嫁とイアーゾーンばかりでなく自分の子供までも殺し、アテーナイ王アイゲウスのもとに逃れる。オリヴィアをこのメーディアと二重写しに描くシムズは、白人の貪欲な大望がはらむ自己破壊を念頭に置いてオリヴィアを創造していることは明らかである。

オリヴィアは「未来においてすべてが暗闇であり、過去においてすべてが陰気で、悲痛に満ち、責めさいなむ」(p. 117) 女性であり、この状況はオリヴィアの叔父バルサザーの奸計によって引き起こされている。『十二夜』が描く騎士サー・トウビー・ベルチは近世

のマナーハウスで厄介な食客と化した騎士を代表しているが、²⁵バルサザーはサー・トウビーのようなオリヴィアに支配された喜劇的人物では決してない。富裕な伯爵家の女嗣子として家を管理し、オーシーノウ公爵の求婚を拒絶しサー・トウビーを叱るというシェイクスピアの設定は完全に覆され、バルサザーはオリヴィアの後見人として権力を振るい、オリヴィアの資産を搾取している。

バルサザーという名は、キリスト降誕の時東方から供え物を携えてベツレヘムに来た三人の博士の一人の名と重なる。彼はキリストの誕生を祝う者であり、キリスト教精神を代表する。バルサザーは陰險な蛇として「恵まれた帝国」としてのオリヴィアの屋敷を支配し、そのホームの中でオリヴィアを汚すのである。アニータ、シルヴィア、ジュアナといった混血の召使いを介して飲食物に薬を入れてオリヴィアを眠らせ、オリヴィアの寝室ばかりか屋敷の庭にある東屋においてその純潔を汚す行為を取る。オリヴィアの東屋は楽園であり、神殿的イメージを付与されたキリスト教教会である。「地上の様々な運命に関係する天使の中でも最も神聖な天使」が訪れる東屋は、キリスト降誕を祝うバルサザーがオリヴィアと近親相姦を犯す場所となる。次の引用の「熟れた」「艶やかな」「近接」といった言葉は、神聖さとは相いれない官能と放蕩がこの東屋に存在することを表している。

It [the summer-house] held a neatly furnished, airy apartment, surrounded by a colonnade which effectually excluded the sunlight from its floors. It was surrounded by ample thickets, which added to the shade, and seemed to give security. It was a sweet solitude, the chosen retreat of contemplation. Here silence had full empire. A happy succession of small courts and avenues through the thickets, opening in all directions, gave free admission to the breeze. These avenues ran through long tracts of the palm, the orange, the grenadilla, and the anana. Their several fruits, more or less ripe, hung lusciously in sight, in close proximity, and drooping to the hand. On each side, the passages were cut through seeming walls of thicket, affording arched walks of the most noble natural Gothic. These all conducted to the one centre, in the light and airy octagon cot to which Olivia had retired. (p. 305)

薬で眠らされたオリヴィアと東屋にバルサザーが一緒にいるところを見たフィリップは、苦悩から逃れるようにしてデ・ソトの陣に走り、フロリダ遠征への参加を表明する。オリヴィアに残された道は黒人の従者

に変装してフィリップにつき従うことだけである。

このように考えると、バルサザーの近親相姦という「罪の暴露」(p. 328)こそ、実はフィリップをフロリダ遠征に参加させた力ということになる。フロリダ遠征はフィリップにとって魅力溢れるホームを一時的に離れることではなく、ホームの破綻による荒野への追放であった。フィリップが夢見たホームは崩壊し、それに代わるホームが彼を再び白人世界に戻すことはありえない。彼が黒人従者としてのオリヴィアといかに親密な仲になろうとも、二人は男女の関係に戻ることはない。オリヴィアは先住民のコカラがフィリップと親しくするのをただ傍観するしかない。オリヴィアがフィリップと行動をとるにでき、彼の信頼を勝ち得るのは、彼女が黒人に変装しているからである。先住民の美を単なる形だけのもので、キリスト教徒の欲求を満足させるのに不可欠な教育や素養が欠如しているといかにオリヴィアが説こうとも、フィリップは「外見はすべすべして光り輝きつつ、その内実は忌まわしきと腐敗が横たわるキリスト教世界の白く塗りたる墓」(p. 410)よりも飾らぬ無垢な先住民を選択する。

バルサザーのこのロマンスにおける重要性は、彼が「十年來の島の住人で莫大な資産とさらに大きな事業を有する」(p. 6)ということにある。オリヴィアが喩えられるメーディアがイアソンとコリントスに移住して十年間幸福に暮らしたことをここで思い出す必要がある。バルサザーがデ・ソトの遠征計画に参画し陣頭指揮を取るのは、キューバの広大な所有地の奴隷としてフロリダの先住民を多数確保するためである。彼の欲望はフロリダの金や「新たに発見された宝を産出する領土の総督」(p. 272)の地位を手に入れることを夢見るまでに高じていくものの、しかし、ポーカロスですら、フロリダのコンキスタドールの人としての名誉と奴隷確保の両方を求める——ポーカロスの盾に刻まれた銘は「目に入るものすべて、これ予のもの」(p. 215)である——のに対し、バルサザールの大望は先住民奴隷の獲得に限定されていると言ってよい。彼のフロリダ遠征への関心がオリヴィアの資産を奪いかねないフィリップの動向に集中していることに、それはよく現れている。バルサザーはホームを拡大しようとする自己中心的で自己破壊的な白人のエネルギーを具現している。

(3)

バルサザーが代表するスペインの騎士道精神、即ち、アメリカの西漸運動のエネルギーの源泉は、富・土地を略奪しそれらを増やすことにある。デ・ソトのフロリダ遠征も同じ欲望から生じたものであった。騎士としてフィリップがオリヴィアを失う運命にあったように、彼の騎士としての情熱はデ・ソト軍の中でそのまま生きながらえることはできない。プリンセスのコカ

ラがデ・ソト軍に捕らえられそうになったとき、フィリップの中で「信頼を勝ち得た徳、つまりは感情と名誉の保障」(p. 417)を意味する騎士道精神は、一瞬「人種と教育という[白人種への]共感」(p. 399)とせめぎ合う。しかし、結局は前者が勝利を収める。また、ココラが逃亡しようとして二人のスペイン人の欲望の犠牲になりかけたときは、フィリップは騎士として二人を力づくで排除し、彼女を守る。このココラ救出のために、フィリップはバルサザーによって国王への反逆罪を問われた挙げ句、デ・ソトによって騎士としての「希望と誇りと榮譽」(p. 445)をすべて剥奪される。フィリップの騎士道精神はデ・ソトには無用の長物でしかない。ここに至って初めてフィリップは先住民の一員として生きる運命を甘受する。やがてデ・ソトのコンキスタを妨害する「運命」としてフィリップは彼の前に立ちはだかり、彼のコンキスタを失敗に終わらせた後、ココラの夫としてアメリカの森に姿を消していく。

ミシシッピ川を発見したことでアメリカの歴史に名を残したデ・ソトだが、その「気まぐれな前進」(p. 514)はミシシッピ川との遭遇をもたらすけれども、彼の夢は「父なる川の、広大で驚嘆すべき濁流」(p. 514)を前にしてフィリップによって押し潰される。

He [De Soto] dreamed not of the glorious territories which they [the vast, turbid and wondrous streams of the "Father of Waters"] watered. He saw not, through the boundless vistas of the future, the numerous tribes who should dwell upon their prolific borders crowning them with the noblest evidences of life, and with the loveliest arts of civilization. The spirit of the Adelantado was crushed. The fires of ambition were quenched in his bosom. . . . His heart did not exactly crave a restoration to his home in Cuba, but the image of the noble woman, his wife, rose frequently, reproachful in his sight. He had loved her, as fervently as he could have loved any woman; but, in the ambitious soul, love is a very tributary passion. It craves love, but accords little in return. Its true passion is glory! (p. 514)

「長い間ヨーロッパ人の想像力を惑わしたあの驚異の未知の世界」(p. 2)のデ・ソトによる征服には、「未来への無限の展望」はない。アメリカ文明の幹線道路としてミシシッピ川がやがて果たすことになる歴史の展開はデ・ソトの想像を越えたところにある。だが歴史のアイロニーは蹉跎を来したデ・ソトの遠征という過去に向かうだけではない。未来において、「最も高潔な生活の証しと最も気高く美しい文明の技術」によってミ

シシッピ川流域の豊かな土地を飾るのは、白人種ではなく「数多くの部族」なのである。

デ・ソトは巨大な松で作った十字架をミシシッピ川の岸辺に立て、キリスト教の象徴として厳粛な儀式を行う。エルヴァスの紳士はデ・ソトを「雅量に富む、有徳の勇士」²⁶として称え、神としての存在を先住民に印象づけたと記録しているが、シムズによれば、その遺骸が部下によって掘り起こされてミシシッピ川に沈められるのは、先住民が「血に飢えた性格、自己中心的な背信、摺んでは離さぬ獐猛な欲望」(p. 517)の権化デ・ソトに復讐するのを恐れたからである。また、「悩める魂」(p. 530)オリヴィアは臨終の床でフィリップに自らの純潔の証しを見せた後に、「多くの守護神の木々の陰になったミシシッピ川の寂しい場所」(p. 530)に埋葬される。スペイン人がミシシッピ川の滔々たる流れに与えた栄冠は、その獐猛な欲望とその犠牲者の死だけであった。

復讐を果たしオリヴィアの愛の誠実を確認したフィリップはミシシッピ川を離れ、サヴァンナ川流域の先住民の村コファチックイに戻っていく。スペイン人の生存者たちは艱難辛苦の末にやがて彼らの「ホーム」(p. 531)に辿り着く。荒野を受け入れたフィリップの顔には「甘美な悲しみ」(p. 531)が見られたとシムズが書いているように、フィリップにとって白人のホームはオリヴィアの喪失と同時に永遠に消滅したのである。

注

- 1 William P. Trent, *William Gilmore Simms* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1892), p. 112.
- 2 Mary C. Simms Oliphant, Alfred Taylor Odell, T.C. Duncan Eaves, eds., *The Letters of William Gilmore Simms* (Columbia: University of South Carolina Press, 5 vols., 1952-1956; vol. 6, 1982), vol. I, p. 147 (以下 *Letters* と略記).
- 3 John C. Guilds, *Simms: A Literary Life* (Fayetteville: The University of Arkansas Press, 1992), p. 81.
- 4 *Letters*, vol. I, p. 144.
- 5 *Letters*, vol. V, p. 394. プレスコットについては *Letters*, vol. V, p. 400n を参照.
- 6 *Letters*, vol. V, p. 393.
- 7 John R. Swanton, *Final Report of the United States De Soto Expedition Commission* (Washington, DC: Smithsonian Institution Press, 1985), pp. 4-11.
- 8 Lawrence A. Clayton, Vernon James Knight, Jr., Edward C. Moore, eds., *The De Soto Chronicles: The Expedition of Hernando de Soto to North America in 1539-1543* (Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1993), vol. I, p. 195. デ・ソト軍のルート確定の困難さとその原因については、Donald E. Sheppard, "De Soto's Trail to Appalachee" (*The Florida Anthropologist*, 1995) を参照。「偉大なる川」がオハイオ川であったとするのは同じく Donald E. Sheppard で、この記述は Sheppard が編集、Native American Conquest Corporation のインターネット・サイトで配信され

- ている “Spanish Conquistadors in North America” にある。
- 9 Charles S. Watson は *Vasconcelos* の主人公フィリップがポルトガル人であるという設定をエルヴァスの紳士と撮めて論じている。Watson, “De Soto’s Expedition: Contrasting Treatments in Pickett’s *History of Alabama and Simms’s Vasconcelos*,” *The Alabama Review*, vol. 31, no. 3 (July, 1978), 199–208 を参照。
- 10 *Letters*, vol. V, p. 399.
- 11 William Gilmore Simms, *Vasconcelos: A Romance of the New World* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), p. 487. 以下 *Vasconcelos* からの引用はすべてこの版に依り、頁数は括弧に入れて示す。
- 12 *Letters*, vol. III, p. 256n.
- 13 Trent, p. 208.
- 14 Guilds, p. 215.
- 15 Guilds, p. 216.
- 16 Trent, p. 15.
- 17 William Gilmore Simms, *Views and Reviews in American Literature, History and Fiction*, ed. C. Hugh Holman (Cambridge: Harvard University Press, 1962), p. 95.
- 18 *Views and Reviews*, p. 92.
- 19 *Views and Reviews*, pp. 92–93.
- 20 マリアンヌ・マン＝ロ, 染田秀藤訳, 『イスパノアメリカの征服』白水社, 1984, pp. 19–20.
- 21 カルロス・フエンテス, 古賀林 幸訳, 『埋められた鏡——スペイン系アメリカの文化と歴史』中央公論社, 1996, p. 148.
- 22 拙稿「シムズの *Charlemont* におけるアメリカ神話と歴史の相克」(『愛知教育大学研究報告』第四十七輯, 1998, pp. 9–16) を参照。
- 23 拙稿「シムズのボーダーロマンスの構造に関する一考察」(『愛知教育大学研究報告』第四十六輯, 1997, pp. 9–17) を参照。
- 24 William Gilmore Simms, *Richard Hurdís: A Tale of Alabama* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), p. 21.
- 25 『シェイクスピア全集』第二巻, 筑摩書房, 1974年, p. 294
- 26 *The De Soto Chronicles*, vol. I, p. 137.

(平成10年9月11日受理)